【ねがいましては】

平成２７年１１月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第３０１号

「一瞬」

昨年１１月、高倉 健さんが亡くなりました。私も「幸福の黄色いハンカチ」が好きで、ＤＶＤを買ってしまったくらいです。謙虚で地味で、それでいて芯があり、自分らしく生きようとする。

ある日の新聞記事より、生前、公にしないことを条件に、各地の刑務所を慰問なさっていたそうです。その中で健さんが受刑者の方々に贈られていた言葉が、「１日も早くあなたにとって大切な人の所にかえってあげてください。」

「大切な人がいれば、またやり直すことができるんです。」と言うことになるのでしょうか。

何かが狂って今の場所にいるだけで、真剣に更生を考えながら刑期を終えることで、また新しい人生を始めることができる。それを信じて出所し、大切な人に笑顔で迎えられるよう日々を送る・・・。現実、そうは簡単にいかないと思います。しかし、人の想いを信じ日々を刻むことは、刑務所にいる方々だけでなく、健常の日々を送っている私たちにも充分当てはめることのできる「しあわせ」の条件だと思います。

さて、子どもたちは親の想いを信じ、日々を刻んでいるのでしょうか。親の過剰な期待に苦しめられ、裏切らないようにと、日々を真剣に生きている子どもたちは多いと思います。生まれてまだ人生経験の少ない子どもたちは、大切な人を極端に意識します。嫌われないように、傷つけないように・・・。それは物心ついた後、自分の意思が成長をし、感情を外へ出し始めたときに学習します。自らの欲望が通らないとき地面に座り込んで動かなくなったり、いつまでも泣きじゃくってみたり、親の想いとは裏腹の行為に走った際に起こります。親の激怒した表情はいつまでも心に残ります。または親の悲しそうな表情が残ります。毎日現れる親の顔。「見捨てないでね。」「ごめんね。」

子は心から反省し、懺悔の念に駆られ続けます。でも言えない一言・・・「ごめんなさい。」「だって、言った瞬間に泣きそうだもの。」
そんなところを見せたくないあまりに、なかなか言えない「ごめんなさい」・・・。

子は、学校から帰るとき、１分でも１秒でも早く「大切な人の所へ帰りたい」のです。

その記事の終盤にもう一つ、「一生懸命生きていると『生きていて良かったと思える一瞬』を味わうことができる」と、高倉さんは語っていたそうです。子どもたちは日々の生活の中で、生きていて良かったと思える瞬間を味わっているのでしょうか。とくに中学校では、単調な授業に飽きてしまったこどもたちが繰り返す「居眠り」だったり、わからなくても質問は一切しなかったり、自らこれを学びたいという気持ちが浮かばなかったり・・・。生活のすべてに無関心になってしまった子どもたち。一生懸命さを忘れてしまった子どもたちは、生きていて良かったという想いを受け取れないでいるのかもしれません。

中学校での定期テスト、やがてやってくる入試、大人たちが作った跳び箱のようなものに、無理矢理向かわされるもの・・・避けて通れば不登校。周りからは軽蔑の眼差しが注がれます。そのように子どもは感じます。親も当然、世間様に向ける顔がない・・・自分の立場を気にしてしまいます。（結構これが子どもたちには不満の材料）

結果などどうでもいい、正面からぶつかってみよう。そのときの表情がまさに一生懸命に生きていること。その表情に周りからは多くの拍手が起こります。（家族はこころで拍手をしています。）「あいつ、何回転んだら気が済むんだ。」家族はささやき始めます。「やるもんだなー。」

「飛べた。」生きていて良かったと思える一瞬です。

今までにない自分になりたい。そう思いながら日々を送る子は多くいます。成長しようとしている瞬間です。人に右を向けと言われたから右を向いた。走れと言われたから走った。それではロボット同然。自分の意思であっちへぶつかり、こっちへぶつかり・・・。それが人生を旅すると言うこと。

我が子が失敗したときについつい出る親の言葉「今度、失敗したら・・・。」それを聞き、子の呟き「あの一、失敗したことが不満なんでしょうか。だとしたら、失敗しない方法で生きてみます。『何もしません。』だったら失敗はしないよ。」子は動きを止めます。じっとしています。確かにミスはしない・・・。

子が美しく見える瞬間は、思いっきりの笑顔を浮かべている瞬間。思いっきり悔しがって泣いている瞬間。思いっきり真剣な表情で立ち向かっている瞬間。成功とか失敗とかはその後ろからついてくるやったことへのご褒美です。

ある子は今までに自分の意思で机に向かったことがありませんでした。初めて２時間、しっかりと向かえました。そのときの表情に拍手です。ある子は目的が見えなくなって歩みを止めてしまうことが多くありました。でも、目的がはっきりした瞬間、自らの意思で力強く歩くようになりました。「乗り越えてやるぞ・・・。」目の前の跳び箱が低く見え始めました。

この２人の心の中に共通しているもの・・・・大切な人に喜んでもらいたい。生きていて良かったと、思える一瞬を共有したい。

どのように中身のある時間を過ごすか・・・この部分に最大の評価を置くべきだと思います。それには、家に大切な人がいなければなりません。あなた方は私にとって大切な人たちです。ありがとう。